

辟蛇の法と禁蛇の術

岡田 充博

一

山野の自然に囲まれて生きる近代以前の人々にとって、猛獣や有毒の生物は大きな脅威であった。中国においては嘗て虎や蛇がその代表であり、これを撃退あるいは封じ込める術が、古くから伝えられていた。虚実織り交ぜて伝えられるそれらの術、あるいは術をめぐる話について見てゆくと、思いがけず面白い資料に行き当たったりする。蛇に関する贅言の続編として、あらためて筆を起こしておきたい。

二

人里離れた山奥に居を構え、不死の丹薬と登仙を

求めて修行に励む道士達にとつても、毒蛇の撃退法は知っておくべき重要な知識であり、晋の葛洪は『抱朴子』において、蛇から身を護る術にしばしば言及している。例えば内篇・至理卷第五には、次のようにある。

呉越（江蘇—広西）には呪法じゆほうがある。あらたかな靈験ごえんがあるが、大抵は氣を呼吸する法である。……毒水の流れる谷川や蝮まむしなどの多い山林に入った場合、普通の人なら少し歩いただけで中毒したり蝮にかまれたりするが、呪法を心得た人が呼吸でもって調伏すると、数十里四方以上も害を被いのけられる。連れの者にも被害がないようにしてやれる。またこの法によれば虎・豹・蛇・蜂

を調伏し得る。すべて匍はいつくばったまま立てなくなる。……[1]

また内篇・登渉篇卷第一七には、さらに詳しく次のように言う。

ある人が問うた、
山や沢に隠れ住んで蛇や蝮を避ける法は？
抱朴子が答える。

昔、田丘には大蛇が多かった。それにここは良い薬を産する。黄帝は田丘に登ろうとした。広成子『神仙伝』は黄帝に教えて雄黄を腰に佩おびさせたところ、蛇はすべて逃げ去った。今でも武都（四川省）産の雄黄、鶏冠とさかに似て黄色いのを五兩以上、身に帯びて山林・草木の間に入れば、蛇を恐れる必要はない。……

まだ山に入らぬうちに、あらかじめ家にいて、まず蛇を禁ずる法を学ぶがよい。日・月および朱雀・玄武（亀）・青龍・白虎がわが身を守っていると思念せよ。さて山林・草木の中に到れば、左に三口の氣息を吸い、口を閉じ、それを山の草の中に吹きつける。その時、この氣息が赤色となり雲霧のように数十里の間に瀰ひ満まんせよ、と念ずるこ

以て上とする。一固まりの石の重さ五兩を肘のあたりに帯びていれば、毒へびは敢えて近づこうとしない。……[3]

随所で殺羊の角を焼いて煙を出せば、蛇は立ち去る。……[4]

この記事によれば、蛇除けの薬剤としては、「雄黄」と「殺羊角」が最も有効だったようである。……[5]

先に引いた『抱朴子』登渉篇にも言及のあった「雄黄」は、砒素の硫化鉱物で石黄とも言い、毒性を有するが、漢方医学では解毒剤、抗炎症剤として用いられる。

では、後者の「殺羊角」とは何であろうか。「殺羊」は、手元の辞書によれば「黒い雄羊」「くろひつじ」「やぎ」、あるいは羊一般を指すなどあって要領を得ない。この方面の知識を欠き、識者の御教示を待つしかないが、ともかくこの羊の角は蛇除けに絶大な効力を発揮したようで、他の文献にも記事が残る。例えば唐の張鷟『朝野僉載』卷五に、次のようにある。

黍を植えて蛇が来たなら、殺羊の角と頭髮を焼

と。もし従者がいたら、何人でもよい。皆な一列に並ばせ、氣息を彼らに吹きつけてやる。こうしておくと、蛇を踏んでも、蛇は動こうとしない。それにほとんど蛇に出逢わないのである。もし蛇に出逢った場合、太陽に向かい、左に三口氣息を吸い、口を閉じ、舌を以て天を柱え、手でもって都関（鼻）であろう。両眉の間が関庭だから）を捻ひり、また天門（両眉の間。『雲笈七籤』一一）を閉じ、地戸（鼻。『七籤』一一）を塞ふぐ。それから物で蛇の頭を抑えておいて、一方の手で蛇のまわりの地面にぐるりと輪を描いて牢獄とし、そこに蛇を入れたと見る。こうなると手で蛇をとらえて弄いんでも大丈夫。蛇を自分の頭や頸に巻きつけても噛みつかない。咒文を解き、氣息を吐いて吹きつけてやらぬ限り、牢獄を出てゆくことはできない。……[2]

また葛洪には、『肘後備急方』と題する医書があり、ここでも辟蛇の方法や蛇毒の治療法について述べている。卷七「治卒入山草禁辟衆蛇藥術方第五十五」の「辟衆蛇方」には、次のような記述が見られる。

辟蛇の薬は数多いとはいえ、ただ武都の雄黄を

けば、蛇は近づこうとしない。……[6]

さらに古小説から探してみると、この角は蛇だけでなく、何と幽鬼妖怪を退散させるためにも用いられている。『太平広記』卷三二八・鬼二「蕭摩侯」は、隋・蕭吉『五行記』を出典とする次のような話である。

後魏の胡太后の末年に、沢州田參軍の蕭摩侯の召使が、黄色の衫（単衣の上着）を洗って庭の樹に干したまま、日暮れに取り込むのを忘れていた。夜半になって摩侯の家の者が起きたところ、この着物が風にはためいて、まるで人のように見えた。てつきり泥棒と思い、刀を手に撃ちかかったが、近づいてみると着物であった。これより以後、家の内外みな恐れおののいたが、さらに数日すると、不意に戎衣に身を固めた二十騎が現れ、家に向かって直進し、旗を掲げ棍棒を振りかざし、往き来しては襲いかかり、それが前後六七度にもなった。家の者は震え上がって、為す術もなかったところ、ある人が「薬方によると、殺羊の角を焼けば、妖異は自ずから絶えたとあります」と助言してくれた。そこですぐに肉屋へ出かけて手に入れ、それ

を焼いた。その後に妖鬼がやって来たが、鼻を掩つて「この家は一体何を焼いたんだ、こんなに臭いとは」と言うのと、くるりと踵を返し、その後怪異は途絶えたのであった。〔7〕

煙を嗅いだ妖鬼が鼻をつまんで退散し、二度とやって来なかったというから、蛇ならずとも辟易する、猛烈な臭気を放つようである。

ところで、この蛇の天敵殺羊は、仏典にも顔を覗かせている。『弥沙塞部和醯五分律』巻二六「第五分雜法」に載る舍利弗の過去世の話には、呪術師（前世の舍利弗）が蛇を捕らえるくだりがあり、それは次のような術で行われる。

過去世に一匹の黒蛇がいて、子牛を咬んだ後に穴に戻った。呪術師が殺羊で呪いをして穴から出そうとしたが、出すことができなかった。そこで呪術師は子牛の前で火を燃やして呪いをし、火蜂に変身して蛇穴に入って、黒蛇を刺した。蛇は痛みに堪えきれず、穴を出た。殺羊は角で掬うと蛇を呪師の前に置いた。……〔8〕

つまり古代インドにおいても殺羊は、蛇駆除のま

シカあるいは山羊とあって、漢訳仏典の資料とびつたり一致するわけではないが、このヘビの天敵は、「殺羊」と重ね合わせてもよいのではないだろうか。それは、穴の前に立たせておくだけでも、蛇への威嚇に十分なり得たと考えられる。また巻一・一一五「呼吸」には、「ゾウの息はヘビを引きつけて穴から出て来させる。雄ジカの息は彼らを焼く」ともあり、鼻息だけでも蛇退治の効果があったようである。なお、「その角を焼くときの煙がヘビを遠避けることはすでに述べた通りだが」とあるのは、巻一〇・九〇「魚の嗅覚と触角」に「ヘビは焼いた雄ジカの角の匂いによって、とくにストラックス（エゴノキ科の灌木の樹脂、香料に用いる）の匂いによって追い払われる」と記されていることを指す。角を焼いた臭いで蛇を追ひ払うのは、中国における「殺羊角」の使用法と同じで、これもまた興味深い。

以上、話題は中国からインド、さらにはヨーロッパにまで広がることになったけれども、影響関係等の委細にまで踏み込むには、残念ながら資料が不足している。また、中印欧の資料相互に見られる差異も無視できない〔10〕。という訳で安易な結びつけは

じないに用いられていたのである。となると、中国との関わりが大いに気になるところであるが、些か気になる相違も見られる。この呪術師は蛇穴の前に殺羊を置くのみで、角を焼いていない。では、蛇穴の前に置くだけで何故効き目があるのだろうか。疑問を解く鍵は、意外なことに遠く離れた西洋の古典にあるように思われる。

古代ローマのプリニウス『博物誌』（七七年完成）の、巻二八・四二「ヘビの咬傷に対する薬」に言う。

シカがヘビの死命を制する敵であって、ヘビを見つけさえすればその穴から引き出して食べてしまうことは知らない者がない。しかし、シカは生きているときにヘビの敵であるばかりでなく、そのからだのいろいろな部分もそうだ。その角を焼くときの煙がヘビを遠避けることはすでに述べた通りだが、雄ジカの頭のいちばん上の骨を焼くとヘビが集まって来るという。この動物の皮をベッドにしてその上に寝るとヘビの恐れはない。……

雄山羊の角あるいは毛を焼くとヘビを遠ざけるし、その角を焼いた灰を飲んだり貼ったりすると、その咬傷に有効だと言われている。……〔9〕

慎むべきであるが、ただ、殺羊の角を蛇除けに用いる習俗が中国固有のものでなく、外来の可能性も高いことは、ここで指摘しておけるであろう〔11〕。

三

殺羊の角による辟蛇の法については前節で切り上げ、次に蛇を自在に支配統御する、禁蛇の術について見てみたい。面白い話としては、晩唐の裴鉞『傳奇』の一篇が挙げられよう。小説集『傳奇』は散逸して伝わらず、『太平広記』の採録などによって読むことが可能であるが、その巻四五八・蛇三の「鄧甲」は、禁蛇の術を道士から授かった男が主人公である。この短編には彼が行った三件の蛇退治が語られており、それぞれに摩訶不思議な術が披露される。いずれも真偽の程は甚だ怪しいけれども、最初の事件で使われる術が分けても興味深い。そこで次にこれを紹介してみよう。術が登場する「鄧甲」の前半部は、次のような話になっている。

宝曆（八二五～八二七）年間に鄧甲という者が、茅山の道士の峭巖に仕えていた。峭巖は真の有道の士で、瓦礫を棄て黄金に変え、鬼神を符で呼び

寄せることができた。甲は誠心誠意仕えて、労苦も厭わず、夜はまんじりともせず、昼も寝台に腰を下ろさなかった。峭巖もまた彼を目にかけ、鍊薬について教えたが、とうとう成功せず、符の術を授けても、終に応驗が無かった。そこで道士は、「君はこの二種の術には天分がない。強いて学ぶべきではない」と言い、彼に有らゆる蛇を統御する術を授けたが、それは天下でただ彼一人だけであつた。甲はその術を会得して帰つた。

烏江（安徽省）までやって来ると、会稽（浙江省）の長官が毒蛇に足を噛まれたところに出会した。苦痛の叫び声は村里を驚かせて響き渡つたが、術を持つ者は皆、誰も止めることが出来なかつた。甲はそこで彼のために治療をおこない、先ず符書によつて長官の心臓を守ると、痛みは立ちどころに治まつた。甲は言つた、「長官を噛んだ当の蛇を呼び出して、その毒を吸い取らせるべきです。そうしないと、足は切断ということになりましよう。この蛇は人の禁呪を恐れて、きつと数里の彼方に逃げ去つてゐるでしょう」と。そこで桑林の中に広さ四丈ほどの壇を建て、周囲に符籙を朱書した白絹をめぐるせ、篆書の符を飛ばして、十里以内の蛇を召喚すると、またたく間に蛇どもがや

けて水となり、ただ背骨だけが地上に残つた。長官の苦痛は消え、彼に厚く金品を贈つた。〔12〕

茅山の道士峭巖が鄧甲に授けた術は、原文では「禁天地蛇術」とある。術の名称かと考えてあれこれ検索してみたが、他には全く見当たらないところからすると、固有名詞として知られた術ではなさそうである。となると、それでは似た話は？ということになるが、これは三篇を挙げるができる。

先ず、動物を集めてその中から危害を加えた者を捜し出す話が、魏・曹丕『列異伝』に見える。『太平広記』巻四六〇・禽鳥一・鶴に載る「鶴 魏孔子」で、次のような内容である。

魏の公子の无忌が、かつて室内で読書をしていた時、一羽の鳩が机の下に飛び込み、^{はたか}鶴が追いかけて殺してしまつた。无忌はその乱暴に腹を立て、国内に命令を下して鶴を捕らえさせ、二百羽余りを捕獲した。忌は剣に手をかけて鳥籠に進んで言つた、「先頃鳩を殺した者は、頭を垂れて罪に伏せ。そうでない者は、羽ばたいて飛び去つてよい」と。すると一羽の鶴がいて、平伏して動くとしなかつた。〔13〕

つてきた。それを壇上に積み上げると、高さは一丈余りになつて、何万匹とも知れなかつた。その後、四匹の大蛇のそれぞれ長さ三丈、汲桶のような巨大さのものが、その蛇の山の上に蜷局を巻いた。その時、百余歩に渡つての草木は、夏真つ盛りというのに総て黄色に枯れ落ちた。

甲はそこで素足になつてよじ登り、その蛇の山の上に登つた。そして青い篠竹で四匹の大蛇の頭を打つて言つた、「お前達を王として、界内の蛇を司らせたのに、どうして人に危害を加えるようなことにさせたのだ。該当者は留まり、そうでない者は立ち去れ」と。甲が下に降りると、蛇の山は崩れ、大蛇が先ず去り、小蛇があとに続いて、去り尽くそうとした時、ただ一匹の土色で箸のような、一尺余りの蛇が、茫然として立ち去ろうとしなかつた。甲は長官を担いで来させて足を垂らし、蛇を叱りつけてその毒を吸わせようとした。蛇は最初、体を伸び縮めさせて嫌がつた。甲がまたこれを叱りつけると何物かが現れて蛇を急ぎ立てる様子で、その長さはたつた数寸であつた。すると脂汗が蛇の背から流れ出し、やむを得ず口を開いて傷口を吸つた。長官は頭の中を何か針のような物が降りてゆくのを感じたが、蛇は皮が裂

集まつたハイタカたちに、「鳩を殺した者は留まつて罪に服し、そうでない者は飛びされ」と命ずるあたりは、「鄧甲」とそっくりである。ただ公子の无忌は、命令を出して鶴を捕獲させたのであつて、方術は全く使われていない。術によるということでは、南朝宋・劉敬叔『異苑』巻九の趙侯の話に次のような一節が見える。

晋の南陽（河南省）の趙侯は、若い頃から様々な怪異の術を好んだ。……侯には白米の貯えがあつたが、あるとき鼠に盗まれた。そこで彼は髪をざんばらに解き放つて刀を持ち、地面に牢獄の絵をかくて、四方に門を開き、東に向かつて長く嘯くと、鼠どもは皆集まつてきた。そこで呪文を唱え、「食わなかつたものは立ち去れ、盗んだものは止まれ」と言つた。すると、十四余りが残つたが、腹を割いて内臓を調べると、はたして米があつた。〔14〕

鄧甲が用いた術とほぼ同じと言えようが、ただ、招集される動物は鼠である。では、蛇は？となると、唐代以降つて、段成式『酉陽雜俎』前集巻五・怪術に次のような話がある。

長寿寺の僧弁の話。彼が衡山（五岳のうちの南岳、湖南省中部）にいた時、村人が毒蛇に噛まれ、すぐに死んでしまった。頭髮は解け、一尺余りも腫れあがった。その息子は、「咎老がもしおいでなら、何の心配もなからう」と言う。そこで咎老を迎えて来てもらった。すると彼は灰でその屍を囲み、四方の門を開いて、先ずこう言った、「もしも足の方から入ったなら、助からない」と。そして足踏みをし、固く手を握っていたが、時がたつても蛇はやって来ない。咎老は大いに怒り、飯数升を取ると、搗き捏ねて蛇の形にして呪文をかけた。すると忽ちくねくねと動いて門を出ていった。しばらくすると、飯の蛇が一匹の蛇を引きつれて死者の頭の方から入り、ただちにその傷を吸わせた。屍はしだいに（腫れが引いて）低くなり、蛇は縮まって死に、村人は何と生き返ったのである。

〔15〕

咎老は蛇どもを集合させるわけではなく、用いる道具や仕立ても異なっている。しかし、これも明らかに鄧甲の術と同系と言えよう。この話から推測すると、こうした禁蛇の術（あるいは術について語る

説話）は、すでに唐代、中国南部に広く分布し知られていたものようである。となると、これは『異苑』の趙侯の術を受け継ぎながら、蛇の多い南方で生み出された中国固有の術かと思われる。しかし、南方熊楠の『十二支考』の「蛇に関する民俗と説話」を開いてみると、次のような一節があつて驚く。

一九一四年ボンベイ板、エントホヴェンの『グジャラット民俗記』一四二頁に、ある術士は、符籙をもつて人咬みし蛇を招致し、命じて創口から毒を吸い出さしめて癒す。蛇咬みを療する呪を心得た術士は、蛇と同色の物を食らわず、産蓐と経行中の女人に触れると呪が利かなくなる。しかる時は身を淨め洗浴し、乳香の烟を吸いつつ呪を誦えて呪の力を復す、と見ゆ。

（「蛇の特質」、平凡社『全集』第一卷一七二—一七三頁）

エントホヴェン『グジャラット民俗記』については知見を欠くけれども、二十世紀初頭のインドに、こんな禁蛇術が伝わっていたのである。毒を吸い戻した蛇が溶けて水になることはないものの、鄧甲や咎老の術に何ともよく似ている。

ではこの術は中国からインドに伝わったものなのだろうか。九世紀中国と二十世紀インドの資料を並べてみれば当然そう考えられようが、事実はその逆だったようである。というのは、同論考は前掲の一文に先立って仏典の説話を引用しており、これなら唐代よりもさらに遠く時代を遡るからである。実は南方論考のこの箇所は、蛇の自殺が古代インドで信じられていたことを例証する一節で、禁蛇術をテーマとしているわけではない。しかし術の起源について考えようとする際、これが極めて貴重な資料となってくれる。以下、長くなるが南方翁の要約をそのまま拝借して示しておく。

たとえば『弥沙塞五分律』に舍利弗病に罹り、呵梨勒果一を牀脚辺に著けたまま忘れおいて出た。瞿伽離見つけて諸比丘に向かい、世尊いつも舍利弗は欲少なく足を知ると讃めるが、われらの手に入らぬこの珍物を蓄うるは世尊の言と違ふ、と言った。舍利弗、聞いてその果を棄てた。諸比丘、それは大徳病気の療治に蓄えたのだから棄てるなかれと言ふと、舍利弗、われこの少しの物を持ったばかりに梵行人をしてわれを怪しましめたは遺憾なり、捨てた物はふたたび取らぬ、と答

えた。仏いわく、舍利弗は一度思い立ったら五分でも後へ退かぬ氣質だ。過去世にもまたその通りだった。過去世一黒蛇あり、一犢子（こし）を螫したのち穴に退いた。呪師、羊の角もて呪したがなかなか出で来ぬから、さらに犢子の前に火を燃やして呪すると、その火蜂と化つて蛇穴に入った。黒蛇、蜂に螫され痛みに堪えず穴を出でしを、羊角で抄うて呪師の前に置いた。呪師蛇に向かい、汝かの犢子を舐つて毒を取り去るか、それがいやならこの火に投身せよと言ふと、蛇答えて、われこの毒を吐いた上はまたこれを収めず、たとい死ぬともこの意を翻さぬと言いおわつて、毒を収めず自ら火に投じて死んだが、舍利弗に転生した。死苦に臨むもなお一旦吐いた毒を収れず、いわんや今さらに棄つところの菓を収めんと。

『十誦律毘尼序』にこの譚の異伝あり。大要を挙げんに、舍婆提の居士、諸儒を請ぜしに舍利弗上座たり。仏の法として比丘の食後今日は飲食美味に飽満たりや否やと問う定めだったので、僧ども帰りのち仏が一子羅喉羅の時沙弥（小僧）たりしかく問ふと、得た者は足り得ざる者は不足だったと答えた。仔細を尋ぬるに上座中座の諸僧は美食に飽いたが、下座と沙弥とは古飯と胡麻

滓を菜に合せて煮た麤食のみくれたので瘦せ弱ったという。仏、舍利弗はけしからぬ不淨食をしたというを聞いて、舍利弗食った物を吐き出し、一生馳走に招かれず布施を受けずと決心し、常に乞食した。諸居士、何とぞ舍利弗が馳走を受けくれるよう仏から勧めて欲しいと言うと、仏いわく、舍利弗の性、もし受くれば必ず受け、もし棄つれば必ず棄つ、過去世もまた然りとて、毒蛇だった時火で自殺した一件を説き、種々の因縁をもつて舍利弗を呵り、以後馳走に招かれたら上座の僧まづ食にかからず、一同へあまねく行き届いたか見届けたのち食らうべしと定めたそうじゃ。しかし件くだんの毒蛇を呪する法を舎伽羅呪と書きおる。

(同一七一〜一七二頁)

引用された仏典のうち前者の『弥沙塞五分律』は、『弥沙塞部和醯五分律』の略称で、殺羊の資料として前節で引いた卷二六「第五分雜法」の同一箇所に当たる「16」。後者の『十誦律毘尼序』は、『十誦律』をいう。第六一卷「毘尼雜品」の「毘尼序」巻下に該對話が見える(『大正新脩大藏經』第二三卷・律部二)。「17」

この仏教説話では、蛇は毒を吸うことを拒絶して

自殺してしまい、術は結局、最後まで遂行されずに終わっている。しかし、蛇を呼んで毒を吸わせる術と術師が古代インドに存在したことについては、疑う余地がない。インドの蛇使いと言え、毒蛇コブラを笛で操る大道芸が思い起こされるけれども、来歴はこのように極めて古く、『グジャラット民俗記』が伝える術のルーツ「舎伽羅呪」は、中国の鄧甲や咎老の禁蛇術の起源と思しきものだったのである。インドと中国に伝わる呪術については、以前「ヴェーターラ呪法」と「殺人祭鬼」とを結びつけてみたことがある「18」。伝播影響の問題は証明が難しいのが常で、その際の結論と同様に、ここでも断言は避けなければなるまい。しかしこの禁蛇術もまた、中印両国の習俗(およびそれにまつわる説話)の比較検討に当たって、興味深い一例となることは確かであろう。

注

1 原文は孫星衍校正本(新編諸子集成第四冊)によれば次の通り。なお『抱朴子』の邦訳は、以下全て本田清訳注「抱朴子 内篇」(東洋文庫・平凡社、一九九〇年)を借りる。

吳越有禁呪之法、甚有明驗「藏本作獻」、多烝耳。……入山林多溪毒蝮蛇之地、凡人暫經過無不中傷、而善禁者以烝禁之、能辟方數十里上、伴侶皆使無爲害者。又能禁虎豹及蛇蜂、皆悉令伏不能起。

2 原文は孫星衍校正本によれば次の通り。

或問曰隱居山澤辟蛇蝮之道。抱朴子曰、昔圖丘多大蛇、又生好藥。黃帝將登焉、廣成子教之佩雄黃、而衆蛇皆去。今帶武都雄黃色如雞冠者、五兩以上以入山林草木、則不畏蛇。……

未入山、當預止於家、先學作禁法。思日月及朱雀玄武青龍白虎、以衛其身。乃行到山林草木中、左取三口烝、閉之以吹山草中。意思令此烝赤色如雲霧、彌滿數十里中。若有從人、無多少皆令羅列、以烝吹之、雖踐蛇、蛇不敢動。亦略不逢見蛇也。若或見蛇、因向日左取三烝閉之、以舌柱天、以手捻都關。又閉天門塞地戶、因以物抑蛇頭、而手烝之、畫地作獄以盛之。亦可捉弄也。雖「藏本作以」繞頭頸、不敢囓人也。自不解禁吐烝以吹之、亦終不得復出獄去也。……

3 四庫全書本によれば、原文は次の通り。

辟蛇之藥雖多、唯以武都雄黃爲上。帶一塊石稱五兩於肘間、則諸蛇毒莫敢犯。

4 四庫全書本によれば、原文は次の通り。
到處燒殺羊角、令有煙出、蛇則去矣。

5 葛洪が示したこうした蛇除けの法は、時代を下って更に詳細になってゆく。そうした中で雄黃と殺羊角は、蛇除けの代表的な藥劑であり続けている。例えば、唐の王勣「外台秘要方」卷四〇の「禁蛇法三種」「辟蛇法三種」、孫思邈「備急千金要方」卷七六の「治諸蛇毒方」や「入山辟衆蛇方」、明の朱橚「普濟方」卷三〇七・諸虫獸傷門の「蛇傷」などにも、雄黃と殺羊角の名が見える。なお『普濟方』卷三〇六・諸虫獸傷門の「辟虎法」には、「凡そ山に入る際には、焼いた水牛や殺羊の角を焼いたものを使用すれば、虎・狼・蛇などは皆逃げ出す(凡入山用燒水牛・殺羊角、虎・狼・蛇皆走)」とあり、殺羊角の用途は虎や狼にも広がっている。

6 原文は、唐宋史料筆記叢刊本(中華書局、一九七九年)によれば次の通り。

種黍來蛇、燒殺羊角及頭髮、則蛇不敢來。

同文は『太平広記』卷四五六・蛇一に、「種黍來蛇」のタイトルで引かれおり、固有名詞とされている。莊司格一「中国中世の説話——古小説の世界」(白帝社、一九九二年)「四 蛇」も、固有名詞として引用する(一五一頁)。他には全く資料がなく、どのような蛇か不明。黍を植えるとその草叢に現れる蛇であろうか。ただ『朝野僉載』のこの一文は、冒頭四字を固有名詞とすると極めて落着きが悪い。(殺羊の角と頭髮で追い払われる蛇が種黍来

蛇に限定される上、「則蛇不敢來」の「蛇」字が余計になる。「黍を植えると蛇がやって来るが、そのときには」の意味に取る方が、文として自然な流れになるので、固有名詞とはせずに訳してみた。待考。

7 原文は、中華書局校点本（一九八一年、第二次印刷）によれば次の通り。

後魏胡太后末年、澤州田參軍蕭摩侯家人、浣一黃衫、晒之庭樹、日暮忘收。夜半、摩侯家起出、見此衣爲風所動、彷彿類人。謂是竊盜、持刀往擊、就視乃是衣。自此之後、内外恐懼、更數日、忽有二十騎、盡爲戎服、直造其家、揚旗舉杖、往來掩襲、前後六七處。家人惶懼、不知何方禦之。有一人云、按藥方、燒殺羊角、妖自絕。即于屠肆得之、遂燒此等。後來至、掩鼻云、此家不知燒何物、臭穢如此。翻然回、自此便絕。

8 原文は、『大正新脩大藏經』第二卷・律部一によれば次の通り（一七三頁下段）。

乃往過去時有一黑蛇、螫一犢子、還入穴中。有一呪師、以殺羊呪、呪令出穴、不能令出。呪師便於犢子前燃火呪之、化成火蜂、入蛇穴中、燒螫黑蛇。蛇不堪痛、然後出穴。殺羊以角抄著呪師前。……

『弥沙塞部、和醯五分律』は全三〇卷。法頭が獅子国（セイロン島）より将来し（東晋安帝義熙九、四一三年）、仏陀什と道生が共に訳出した（四二三〜四三四年）。鎌田茂

雄・河村孝照他編『大藏經全解説大事典』（雄山閣出版、一九九八年）による。

9 中野定雄・中野里美・中野美代訳『プリニウスの博物誌』全三卷（雄山閣出版、一九八六年）による（第三卷二八七〜二八八頁）。以下の引用も同じ。鹿と蛇については南方熊楠に「The Hart and the Serpent（牡鹿と蛇）」（一九二七年）、「Deer devouring Snakes（蛇を食う鹿）」（一九二五年頃）の英文論考二篇があり、後者においては、プリニウス『博物誌』のこの記事が取り上げられている。飯倉照平監修・松井竜五他訳『南方熊楠英文論考（ノーツアンドクエリーズ）』誌篇』集英社、二〇一四年）を参照（七一〜七一五頁）。

なお、蛇除けに鹿の角を燃やすことは、アイリアノス（一七〇頃〜二三五）『動物奇譚集』にも見える。中務哲郎訳『動物奇譚集』（西洋古典叢書・京都大学学術出版会、二〇一七年）第九卷「二〇 蛇よけの法」を参照（第一冊、四一六〜四一七頁）。

10 関連して付け加えておけば、プリニウス『博物誌』では蛇の天敵とされるシカであるが、中国にはそうした通念は無く、大蛇がシカを呑む逆の話が一般的である。（ただ、『抱朴子』登渉篇には猪の耳垢と麝香丸が蛇除けの効能を持つとする一節があり、その理由を、麝香鹿や野猪が蛇を食べるところに求めている。）蛇の天敵といえば中

国ではムカデが知られ、これも『抱朴子』登渉篇に、南人は山に入る際、ムカデを竹筒にいれて行くところある。蛇を察知するとムカデは筒の中で暴れ出し、その氣息で蛇の動きを封じ、大蛇であつても即死させるといふ。こうした国による違いについても考察が必要となつてこよう。なおシカを呑む大蛇の話については、拙稿「落語『蛇含草』をめぐって」（横浜国大『国語研究』第三五号、二〇一七年）では、『太平広記』卷四五九・蛇四所収の「番禺書生」（出典は作者不詳『聞奇録』）を引いたが、その他の資料については、『吞卵』から『吞象』まで（横浜国大『国語研究』第三六号、二〇一八年）を参照されたい。

11 一点付け加えておくと、日本の場合、蛇除けあるいは退治の方法としては、タバコのヤニが良く知られており、韓国の民話にもこれが登場する。また南方熊楠『十二支考』の「蛇に関する民俗と伝説」によれば、アフリカ産のパップ・アッダーという猛毒の蝮も、煙草汁で即死するといふ（平凡社『全集』第一卷二〇六、二二二頁）、この方法も国境を越えた広がりを持つようである。ただ中国においては、タバコのヤニを使う話は何故か見当たらない。

なお、蛇と煙草のヤニについては、拙稿「落語『田能久』をめぐって——『慢頭こわい』付記——」（『横浜国大『国語研究』第三〇号、二〇一二年）の追記で触れてお

たが、南方論文の存在を見落とすなど不備が目立つ。他にも、柴田宵曲『妖異博物館』（青蛙房、一九六三年）ちくま文庫、二〇〇五年）の「煙草の効用」があり、『北窓瑣談』に加えて『譚海』の煙草の荷を背負った商人の話が載っている（文庫本二〇六〜二〇八頁）。この場を借りて補っておく。

12 晩唐の裴鉞の撰とされる『伝奇』全三卷は、散佚して伝わらず、『太平広記』等に収載された三十数話が現存する。「鄧甲」前半部の原文は、次の通りである。（中華書局校点本をもとに、一部を他の版本によつて改めた。改めた文字はゴシック体で示し、「」内に中華書局本の原文を記しておいた。）

寶曆中、鄧甲者、事茅山道士峭巖。峭巖者、眞有道之士、藥變瓦礫、符召鬼神。甲精懇虔誠、不覺勞苦、夕少交（安）寢、晝不安眠。峭巖亦念之、教其藥、終不成、受其符、竟無應。道士曰、汝於此二般無分。不可強學。授之禁天地蛇術、寰宇之内、唯一人而已。甲得而歸焉。至烏江、忽遇會稽宰遭毒蛇螫其足。號楚之聲、驚動閭里、凡有術者、皆不能禁。甲因爲治之、先以符保其心、痛立止。甲曰、須召得本色蛇、使收其毒。不然者、足將別矣。是蛇疑人禁之、應走數里。遂立壇於桑林中、廣四丈、以丹素周之。乃飛篆字、召十里内蛇、不移時而至。堆之壇上、高丈餘、不知幾萬條耳。

後四大蛇、各長三丈、偉如汲桶、蟠其堆上。時百餘步草木、盛夏盡皆黃落。甲乃跣足攀緣、上其蛇堆之上、以青藤敲四大蛇腦曰、遣汝作主〔五〕主掌界內之蛇、焉得使毒害人。是者即住、非者即去。甲却下、蛇堆崩倒、大蛇先去、小者繼往、以至於盡。只有一小蛇、土色肖筋、其長尺餘、慚然不去。甲令舁宰來、垂足、叱蛇收其毒。蛇初展縮難之。甲又叱之、如有物促之、只可長數寸耳。有膏流出其背、不得已而張口、向瘡吸之。宰覺其腦內有物如針走下。蛇遂裂皮成水、只有脊骨在地。宰遂無苦、厚遺之金帛。

13

原文は、中華書局校点本によれば次の通り。

魏公子无忌曾在室中讀書之際、有一鳩飛入案下、鵠逐而殺之。忌忿其驚展、因令國內捕鵠、遂得二百餘頭。忌按劍至籠曰、昨殺鵠鳩者、當低頭伏罪。不是者、可奮翼。有一鵠、俯伏不動。

14

原文は、古小説叢刊本『異苑 談藪』（中華書局、一九九六年）によれば次の通り。

晉南陽趙侯少好諸異術。……侯有白米、爲鼠所盜、乃披髮持刀、畫地作獄、四面開門、向東長嘯、羣鼠俱到、呪之曰、凡非噉者過去、盜者令止。止者十餘、剖腹看臟、有米在焉。

15

許逸民『酉陽雜俎校箋』（中華書局、二〇一五年）によれば、原文は次の通り。□の箇所の文字は、「辯」の

俗字（「言」の上に「巧」が乗る）の譌字で、「巧」の右部分を「凡」に作る。

長壽寺僧口言、他時在衡山、村人爲毒蛇所噬、須臾而死、髮解、腫起尺餘。其子曰、咎老若在、何慮。遂迎咎至。乃以灰圍其屍、開四門。先日、若從足入、則不救矣。遂踏步握固、久而蛇不至。咎大怒、乃取飯數升、搏蛇形、詛之、忽蠕動出門。有頃、飯蛇引一蛇、從死者頭入、徑吸其瘡。屍漸復、蛇飽縮而死、村人遂活。

本話は、『太平広記』卷四五八・蛇三にも収められ、字句に若干の異同がある。

16 注8の引用に続く原文は次の通り（第二二卷一七三頁下段）。

呪師語言、汝還舐毒。不爾投此火中。黑蛇即說偈言、我既吐此毒、終不還收之。若有死事至、畢命不復迴。於是遂不收毒自投火中。佛言、爾時黑蛇者舍利弗是。昔受如此死苦猶不收毒、況今更取所棄之藥。

17

大要のうち、「仏言わく舍利弗の性……」以下に該当する原文を示せば、次の通り（第二三卷四六四頁上段）。

佛告諸人、汝等莫求舍利弗使受請。舍利弗性、若受必受若棄必棄。舍利弗非適今世有是性、乃前過去亦有是性、若受必受若棄必棄。汝等今聽。爾時世尊廣說本生因緣。過去世時有一國王、爲毒蛇所螫。能治毒蛇、

作舍伽羅呪、將毒蛇來。先作大火、語蛇言、汝寧入火耶、寧還噉毒。毒蛇思惟、唾竟云何爲命故復噉已吐、不可還噉、我寧入火死。如是思惟竟投身火中。佛語諸人、蛇者今舍利弗是。此人過去世、若受必受、若棄必棄。今亦如是。

『十誦律』は全六十一卷。後秦の弗若多羅と鳩摩羅什の訳、卑摩羅叉の補訂。鎌田茂雄他編『大蔵經全解説大事典』による。

18 拙論「『殺人祭鬼』溯源」（名古屋大学『中国語学文学論集』第18輯、二〇〇六年）